
神戸山岳会 月報

昭和53年12月1日

No.85



昭和53年8月 別山沢大スラブ壁

発行 神戸山岳会

神戸市生田区中山手通1丁目105の9 前田方

編集 星野

— 目 次 —

昭和 53 年度夏山合宿報告	1
行動記録 (B班)	幸 内 義 孝 2
黒部丸山東壁左岩稜 ~ 別山沢大スラブ壁	星 野 辰 也 2
夏山合宿の食担を終えて	矢 木 研 三 5
個人山行	
屏風岩 — ルンゼ	星 野 辰 也 6
槍ヶ岳 ~ 笠ヶ岳	幸 内 義 孝 8
餓鬼岳	新 川 利 夫 9
雨飾山	星 野 辰 也 10
越後三山	星 野 辰 也 11
甲斐駒ヶ岳 (行動記録)	野 島 博 恵 14
(食料担当として)	国 沢 昭 美 15
(空は青く澄んでいた "されどひざは痛し")	大 川 綾 子 16
(終わりに)	萩 本 練 都 子 16
越前・荒島岳	星 野 辰 也 17
奥秩父	国 沢 昭 美 18
八ガ岳	大 下 澄 子 19
例会報告	20
比良・沢登り	矢 木 研 三 22
編集後記	23

昭和53年度夏山合宿報告

本年度の夏山合宿は黒部および剣岳で、下記の通り行われました。

参加者 A班 三浦(C L)、星野(S L)

B班 幸内(装備)、矢木(食料)、上原(渉外・記録)、萩本、内藤②、
岸本、野上①

行動日程

8月13日 A班 大阪発(前夜)—— 大町—— 扇沢—— 黒四ダム—— 内蔵助谷出合
—— 丸山東壁左岩稜—— 内蔵助平—— 丸山基部
B班 大阪発(前夜)—— 富山—— 上市—— 馬場島—— 白萩川—— 小窓
尾根—— 池ノ谷二俣

8月14日 A班 丸山基部—— ハンノ木平
B班 池ノ谷二俣—— 右俣(雪渓崩壊)—— 二俣—— 雷岩

8月15日 A班 ハンノ木平—— 別山沢出合—— 別山沢大スラブ壁—— 大スラブ壁下
降—— 別山沢出合—— ハンノ木平
B班 雷岩—— 馬場島—— 富山—— 帰神

8月16日 A班 ハンノ木平—— 黒四ダム—— 扇沢—— 大町—— 帰神

池ノ谷ドーム稜全員登攀を目指したB班が、右俣上部にて雪渓が崩壊し3名がまきこまれるというアクシデントがあった。しかし全員の協力によりとにかく無事下山できたことは不幸中の幸いであるとともに、常に事故(最悪の場合は死)というものと隣合せで行動せねばならぬ山登りというものについて、あらためて考えさせられた合宿であった。これらの膚で感じたところの生きた教訓をもとに、新たなる気持ちで自己のポテンシャルを高め、より高度なるアルピニズムをともに究めていきたく思い、夏季合宿の反省とする。

行動記録（B班）

幸内 幸孝

B班（メンバー） 内藤②、萩本、野上①、岸本、幸内、矢木、上原

8月12日 いつものように大阪駅に集まる。そして富山へと行く。

8月13日 富山（5:30）——上市（6:00）——馬場島（6:50～7:00）
——取入口（7:50～8:25）——池ノ谷出合（9:01）——小窓尾
根入口（9:40）——頂上（12:00）——池ノ谷（12:20～13:00）
二俣（14:30）

8月14日 起床（3:40）——出発（5:20）——右俣（7:20）——"アクシ
デント"——テント場（10:00～11:30）——小窓尾根入口（17:30）

8月15日 起床（4:00）——出発（9:00）——馬場島（12:45）——富山
(15:00)

感想

今回の夏山についてはいろんなことを学ばされた。計画においてもいろいろ変ったし、又2班に別れてよかったですとも思われた。何かあって思う、自分の心もおかしいのではとも思ったし、今度の夏山合宿の落とし穴はやっぱりいろんなこと、まず計画・心構・登山の認識などいろんなことがまぎりあって起こった。こんなことを二度とくり返さないよう、いつも一人で山へ行く気持ちになって計画し、案をねってもっと慎重に行きたい。

黒部丸山東壁左岩稜～別山沢大スラブ壁

星野辰也

A班（メンバー） 三浦、星野

8月13日（晴） 今回の夏季合宿は我々2名の為、個人山行と同じようなものである。別動隊のB班も今ごろは剣岳へ向っていることだろう。松本駅では餓鬼岳へ行かれる新川さんを車中窓ごしに見かけたが、先方は気付かれなかった様子である。同じ電車に乗られたのかと思い三浦君が探しに行ったが乗られていなかった。おたがいの良き山行を願って大町へと向かう。

大町より扇沢までタクシーで入り、間一髪のところをトロリーバスに間に合う。もう数名で1時間待たされる所であった。黒四ダムへ到着、さっそく出発の準備をする。黒四ダム～内蔵助出合間は、昨年の合宿で三ノ窓よりの雨中重荷で苦しめられた所だ。しかし本日の黒四ダム～内蔵助出合間は非常に近く感じた。出合より内蔵助谷へ入り、丸山東壁のルンゼ下部の沢筋にベースを置く。東壁の大ハングが圧倒的にせまっているが、なんとなく簡単に登れそうな気がする。縁ルートと南東壁へは各々2パーティーほど取付いている。我々の向かう左岩稜は誰もいない。

ベースで登攀準備をし、さっそく取付きへと向う。右岩稜へは中央壁側より取付く。全体的にブツシユの多い壁である。2ピッチ目などは大きな木を3～4m登り1m程はなれた壁へ人工で飛び付く程である。中央バンドとほぼ同じ高さにある洞穴に入り込み、ジリジリ照りつける黒部の太陽から身をかくす。なにしろ暑い。六甲のゲレンデの耐暑訓練が役にたつところだ。洞穴より左上へ又してもブツシユ登りである。ブツシユ帯をどんどん登る。やがて中央壁のパーティと合う。彼らはかなりバテ気味である。話によると大ハングでラストが墜落し10m程空中遊泳したらしい。脱出に相当手間取ったとのことだ。そういえば、左岩稜下部の登攀中大ハングにザイルが垂れているのが見えた。大きなハングのあるルートにはユマールぐらいは持って行きたいものだ。彼らと共に丸山の頭へ向かう。

内蔵助平への下降路は、踏跡はあるが草付きのスリップしやすいルンゼである。途中一ヵ所懸垂下降をする。平へ到着した時は真暗であった。さっそく水分を補給する。あとはベースへ下るのみである。岩登りをしたという実感はあまりなかったし、Recommendできるルートではない。

8月14日(晴) 本日は中央壁を登る予定であったが、黒部の太陽は朝からあまりに強烈すぎてジリジリと太陽に照らされている東壁を見上げると登る気がだんだんなくなってきた。そう思うのは我々だけではないのか、本日の丸山の全ルートに1名も取付いていない。静かなものだ。"決定"本日はノンビリ休養することにする。B班諸兄すまないなあ！

昼近くまでブラブラしてから、ハンノ木平へ向かう。途中、大タテガミ壁はすばらしい眺めであった。特に中央ルンゼは目を見張る。黒部川はダムの観光放流で非常に濁っている。釣師が、川原で糸を垂れていた。ハンノ木平は我々2名のみで静かなものだ。夕方放流停止後30分程で黒部川の水位がぐんぐん減りだし、30～50センチ程減ると水も澄んできた。焚火をして川原で寝ることにする。

8月15日(晴のち雨) 昨日の休養の為、本日は調子がよい。これからがいよいよ未知

との遭遇である。黒部下ノ廊下を一路別山沢へと下る。途中新越沢の2段になった滝が美しい。山渓の写真でよく見るやつだ。大屏風岩のトラバースを越えた後の雪渓のトラバースで、川原まで下ったため、草付の悪いトラバースがあった。正規のルートを取るべきである。やがて別山沢出合へ到着する。別山沢出合は圧倒的な雪渓で埋っている。しかし左俣は二俣の上部でスッパリ切れており、途中にもポツカリ大きな穴があいている。緊張するところだ。アンザイレンして、雪渓の一番厚いと思われるところを渡る。渡り終えて水を補給する。雪渓の下は40m程の滝がある。岩場へ移ってから非常にいやな草付のトラバースがある。大スラブルートへの取付きは、ツルツルに磨かれたスラブである。壁全体が同様なスラブ帯でフリクションがきき実に快適である。250m程あっという間に登ってしまった。一服するのにちょうどよいテラス状の涸滝がある。滝の下には岩がえぐれて水溜りがあった。ここからが上部の登攀となる。1ピッチはコンテで滝の上へ出て、次に凹角状のスラブを一気に4ピッチ登る。残置ハーケンはゼロである。凹角から岩稜へと移り2ピッチ程登るとブツシユも多くなりだし、さしもの大スラブも終了点の感じがしてくる。多くのパーティは大スラブ尾根より別山～ハシゴ段乗越経由で内蔵助平へと下降している。我々は登ったルートよりやや上部のルンゼ状のところを下降することにする。草付とブツシユ帯をルートファインディングしながらどんどん下る。1時間程で別山沢左俣本谷へ到着した。ちょうどF5とF6の間ぐらいで、上部には滝が続き、また下部にも右岸にスラブ帯を持った滝が連続している。40mいっぽいのトラバースを3度くり返してやっと大スラブ壁へ到着する。大スラブ壁下部をコンテでトラバースして最後の1ピッチのみは懸垂下降をする。再び雪渓を下降している時、雨が降り出した。最悪の状態である。ドーンドーンと音をたてて雪渓が崩壊している。一刻も早くこの場を脱出しようと必死に下る。頭上では雪が、足下では雪渓の崩壊音とがシンフォニーを奏でている。悪い草付トラバースを無事終了して、ずぶぬれで二俣へ到着し、まずはヤレヤレという感じである。本日はB班と合流する予定である。雨で下ノ廊下全体にわたり、あちこちに数百メートルの滝が出現する。さすがは黒部峡谷である。雨中ひたすらハンノ木平へと向う。

ハンノ木平へ到着してみると我々のテントがポツンと一張あるだけである。期待していただけに残念である。仕方なしに岩小舎を探し、焚火を焚いて残飯整理となる。雨の中、岩小舎も住めば都である。

8月16日(晴) 待てど暮せどB班は現われない。内蔵助出合まで行き、1時間程さらに待つがやはりこない。これで下ノ廊下溯行計画もパバーである。仕方なしに黒四ダムへ戻り大町より神戸へ帰る。

夏山合宿の食担を終えて

矢木研三

今回の合宿が種々のいきさつから、A班とB班の二班編制として、前半を各班が別の地域に入山、日程の後半合流して行動する事に落ち着いたのが準備会を3日後にひかえてであった。今迄に多人数の山行における食料を扱った経験がなく、そこですでに出来上っていた初めの計画書の献立表を手直ししてB班の献立表として流用したのであるが、食料の加工に採用したストーブの事や、食事のボリュームが多少とも少な過ぎた面はいなめないと思った。このあたりが反省会で「研究不足の一事が尽きる」と言わしめた所であろう。当初から今回の合宿では、よりスピーディーな行動をと、装備の軽量化が前面に押し出され、それに伴って今迄の石油に替ってガソリン・ストーブを採用、これの使用取り扱いにも習熟する事になっていたのであるから、食担としては当然採用された装備を十分考慮して計画立案すべきであった。そうする事で燃焼時間が短かくても途中で注油しなおすといったわざらわしさも避けたと考えられるのである。多人数であれ少人数であれ、それぞれの胃袋を満たす食料を加工するのに使用するストーブの種類に問題があるのでなく、山行形態と個人の食事に対する考え方の相違に問題があると思われる。言替えると登山の中で食事をどのように位置付けるかによって食料の種類や調理の時間が決まり必然的にストーブの大きさも決まると思うのである。ガソリンの方がその取り扱いに多少注意を要するものの、夏山ではあまり問題にならぬが石油より火力の面ではまさっているし、プレヒート不要のストーブもある。これなど冬山など低温下での使用に適しているし今回問題の燃焼時間も満タン(0.5 l)で3時間と長い。今回使用した2台の小型ストーブとあれば重量や体積の面でも十分たち打ちできたと思われる。石油かガソリンかといった事はこのように考えると個人の好みで決めて、その山行で必要としている能力を満たすものであればさしつかえなさそうである。

個 人 山 行

屏 風 岩 一 ル ン ゼ

星 野 辰 也

昭和53年7月15日～16日 パーティー 三浦、星野

7月16日(晴) 上高地(7:15)～横尾(10:30)～一ルンゼ出合(11:10)～東壁
基部(12:20)～一ルンゼ取付(13:00)～下部終了(15:20)屏風尾根終了点(17:20)
～屏風の頭(16:00)～最低コル(17:00)～徳沢(21:00)

今年は梅雨明けが早く、7月の太陽はあたかも下界の我々をアルプスの峰々へ追いたてているようだ。運賃値上げ直後のちくま号で松本へ到着。さっそく上高地へタクシーの合い乗り(1人頭1,700円)で向かう。大正池のその姿は美しい恋人がだんだん年を取っていくようで、なにかものあわれを感じる。東電の努力も焼け石に水という感じである。上高地で一服の後、横尾を目指す。さすが夏山シーズンである。人々は思い思いの山々へ向ってマイペースで梓川ぞいの道を歩んでいる。我々は快足電車で横尾へ到着する。ここで屏風岩を望むも昨年の錫杖岳前衛フェースのその時のような威圧感はない。見なれた屏風岩の為かどうかは知らぬ。横尾の岩小舎より梓川を渡り一ルンゼの押出しを登る。花崗岩の白さが真夏の太陽の光を反射して目にしめる。一ルンゼの取付には、豊富な残雪があり、ここで昼食を取る。見ると一ルンゼに先行パーティーがあり、少々がっかりする。東壁も大スラブ、雲稜会ルートそれに下部岩壁東壁ルンゼにも各々パーティーが取付いている。女性も1人いたがあまりうまくなかった。だがその度胸に感心するとともに、次元の差を感じた。

一ルンゼの取付へは東壁パーティーの落石を避ける為、いやな雪渓の上にルートを取らねばならぬ。スリップしたらアウトである。クレッターとハンマーでのカッティングではあまりいい気持ちではない。この雪渓の登りと最上部の脆いルンゼ状のフェースが一番いやであった。雪渓より岩へ移るところは、シユルンドの状態が解らず、体重の軽い小生が三浦のピラーで先行する。一番厚そうな所よりシユルンドをのぞくとガツチリ岩についている。ここより岩へ移り10m程岩を登って、いよいよ一ルンゼの登攀開始である。三浦トップでフリクションのよく利くフェースを登る。岩も硬く快適にザイルが伸びる。次のピッチも引き続きフェースを登る。各ピッチ毎に快適なテラスがあり高度感はぜんぜんない。次に右寄りに登り、そして本流のスラブを登る。ここに真新しいシユリングが足場用としてぶらさがっている。これを使ってチム

ニーを登る。一ルンゼは全体にわたって完全なフリクションの個所がところどころあるが、乾いた岩とクレッターで非常に快適であった。横断バンドの上に出てから次の10m程登ってから一度ピッチを切っていよいよ一ルンゼの核心部に入る。チムニーは小生は苦手なのでこの2ピッチは三浦にトップを頼む。最初のツルツルのチムニーをハーケンを頼りに登り、次のピッチはチョックストーンを越えて又してもチムニーである。初登攀者は一ルンゼをノーピンで登ったそうだが、その力量は想像を絶する。7ピッチ目は小さなハングを右に廻り込むところがポイントだがハーケンが打ってあり比較的容易であった。むしろハングを起えてからのルンゼの方がいやな感じである。ここではザイルを伸ばしそこなってルート左のテラスでビレーを取ったがもう10m登るべきであった。次に傾斜のゆるいスラブを40m登り下部の登攀を終えた。ここで東壁や遠く常念岳、大天井岳それに昨年の赤沢山を眺めながら一服する。

この後は上部2ピッチで終了と思うと気楽なものだ。しかしこの緩斜帯を登り始めると想像とは大部違っていた。傾斜、フリクションの利き具合はよいのだが、落石の危険が、登攀の喜びを減じてなお余りある。融雪期の落石があちこちにひっかかっており、一触即発の状態である。スラブ最上部で一発落としてしまったが、幸い100m下の雪渓でストップした。スラブを登り終えると上部左方に脆そうなルンゼが見えて来た。Ⅲ級程度の岩場が60mあったがコンテで登り、チョックストーンの下のトンネルをくぐって、いよいよ最終ピッチである。下部チムニー2ピッチのお返しで最終ピッチはトップで登ることにしたが、5m程登ってすぐ後悔した。どの岩もみな浮いておりいつ落ちても不思議でないのばかりである。20m程登り右へ移り草付きのテラスへ出た。このピッチは極力避けた方がよい。ダイレクトに登った上部にシュリングがあったが、そこを登ったのは積雪期ではないかと思う。カン木でビレーしてセカンドを迎える、ここに650mの登攀を終える。所要時間4時間あまりであり、まあまあかな。

ここより尾根ぞいに屏風の頭へ向い、頭の手前で一服する。徳沢が手に取るように望まれる。最低コルよりパノラマ道をどんどん下る。今日のねぐらの徳沢を目指して、月明りの中を慶應尾根、奥又白谷を下る。月光と2つのヘッドランプの明り、奥又白谷の白い石、残雪それに融雪の流れ、山に来てよかったですと思うひとときである。梓川より新村橋を渡り徳沢へ21:00に到着する。屏風を2人で担ぎ上げた3ℓの水も最低コルへ捨ててきたので荷物は軽いが、早朝からの行動で心より疲労感を味わう。Goodnight - everybody !

7月17日(晴) 徳沢(7:45) ~ 上高地(9:00) ~ 神戸

朝の徳沢は小鳥のさえずりで目をさます。ロマンチックやなあ！非常に簡単な朝食を取り上高地へとブラブラ歩く。上高地はまさにアンノン族のたむろする所となった次第である。

槍ガ岳～笠ヶ岳

S 53 年 7 月 30 日～8 月 2 日

7月 31 日 大町(5:00)——葛温泉(5:40～6:00)——ニゴリ沢温泉
(7:20)——東沢出合(8:00)——湯俣(9:30)——千天の出
合(11:20)——北鎌沢出合(13:45)——北鎌沢上部(17:50)
穴グラで寝る。

8月 1 日 出発(6:30)——北鎌尾根コル(6:50)——頂上直下(9:45)
——頂上(10:25)——殺生小屋(10:50～11:20)——双六小屋
(14:30)——秩父平(17:30)

8月 2 日 出発(4:30)——笠ヶ岳山荘(6:10)——笠ヶ岳頂上(6:30)
——槍見温泉(10:30)

感 想

葛温泉から東沢出合迄は荷を運んでくれるので楽ではあるが平坦な林道を約2時間歩く。

ジュースを飲んで荷を背おい湯俣へ急ぐ。今日はコル迄と思う。湯俣から千天の出合と歩を進めて行く。道ははっきりしており迷うことはない。北鎌沢出合がちよっとわかるだろうかと心配だったが、対岸の貧乏沢がはっきりわかったので北鎌沢だと確心が持てた。

水は豊富にあり、上部は雪渓がつまって人もだれも合わず、満足の行く単独行であった。

北鎌尾根は独標の廻り込みや頂上直下のチムニーも聞く程はむずかしくはなかった。ただ踏み跡が多いので道に迷わないよう気をつけてほしいのと、頂上直下は赤ペンでの目印がふんだんにあったので迷うことはない。

槍ヶ岳より西鎌尾根は人の多い道をたんたんと下り双六へ、双六より秩父平へはタンタンとした道だった。秩父平より笠ヶ岳へはすばらしい稜線歩きであった。笠ヶ岳より槍見温泉へは地の底へ下るような感じで下へ下へとすぐ下ると下り終ったころ、目前に岩壁が見えすばらしく思えた。槍見温泉について風呂へ入って帰った。楽しい1人旅であった。

(幸内 義孝)

餓鬼岳

今年は僅か乍らも盆休みが取れたので念願の餓鬼岳に行って來たので最近の状況と印象を御傳えします。

餓鬼岳は最近人も入るようになつたが、未だ未だ静かな登山ができるし頂上直下の餓鬼岳小舎は小舎の親爺の性格が反影し、所謂昔風の山小舎で懐かしみがあり年輩の登山者に固定客が多いようである。

今年から小舎の親爺が東沢乗越から中房温泉への廃道となっていたのを伐って整備したので燕岳の雑踏をさけて中房温泉へ下れたので随分楽になった。来年は葛温泉への廃道を整備するといつてはいたので唐沢岳の往復とか剣ズリの岩場で遊ぶとか、種々ルートが取れるので軽くアルプスを登って来ようというには丁度良い山である。

餓鬼岳の登りは白沢をつめて大屈山の稜線をたどるのが一番便利だが、白沢の登りは恐らく北アルプスの一般登路で一番えげつない登りだらうと思う位えらい。

剣ズリの岩場は稜線を歩いたが軽い岩の散歩でザイルはいらない。側壁を登るなら手頃の岩壁があるが少し岩がもろいようである。

何れにしてもロートルの登山に適した良い山であった。

(時間記録)

8月12日 大阪発夜行

タクシー
8月13日 大町(6:00)——白沢(6:25~7:00)——紅葉滝
(7:40)——魚止滝(8:15)——稜線(11:00)——大屈山(11:
30~12:15)——餓鬼岳小舎(15:05)

8月14日 餓鬼岳小舎(6:30)——剣ズリ縦走——巻道(8:55~9:05)
——東沢乗越(11:10~11:25)——中房川源流(11:50~12:35)
——中房温泉(14:30)

(新川利夫)

雨 飾 山 (1963.2m)

星 野 辰 也

S 53年9月22日～23日

メンバー 星野、萩本

9月22日(雲) 大阪発(22:20) — 糸魚川 — 中土 — 小谷温泉(8:00)

—— 雨飾山(12:00～12:30) — 梶山新湯(15:00)

先週の台風で滝谷山行がパターになつたので、その見返しとして雨飾山へ行くことにした。

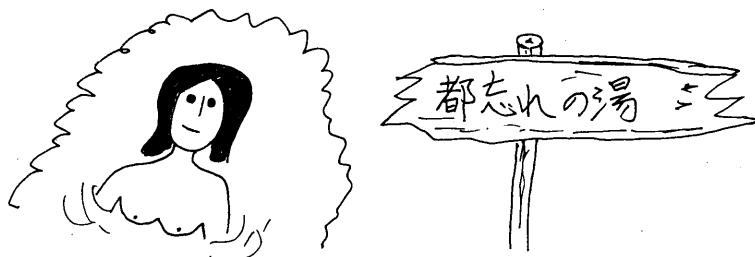
雨飾山は3年前に焼山、火打山、妙高山と歩いたときに登りそこねてしまったのである。

中土駅前で1時間程バスを待ち、オンボロバスで小谷温泉へ向う。天気はいま一つである。

雨飾山荘近くでポツリ、ポツリと降つて來た。林道を1時間程歩き、林道と分れて大海川ぞいに静かな道を一路雨飾山へと歩む。大海川と分れて標高差で300m程登り、そこより雨飾山へ突き上げている沢へ下る。沢の上部には雪渓が残つてゐる。上部のフトンビシの岩壁はガスのため見えず残念である。沢より頂上までは標高差450m程ある。雨飾山より北方には近年クライマーの10,000Vの目差しを受けている海谷山塊の山々が見える。今夜の宿ははるか下方の梶山新湯である。このルートは登るのは大変と思う。2時間余りで新湯に到着する。小さっぱりした宿だが、都忘れの湯は少し温まりすぎる。夜間、若い女性が4～5人露天風呂に入浴しておりにぎやかなものだ。日本はまだまだ安泰です。

9月23日(晴) 新湯(8:00) — 山口(9:15) — 西山(11:10) — 小滝駅(11:45) — 明星山南壁偵察(12:20) — 小滝駅(14:40)

夜半の雨もあがり、山道を山口部落へと下る。駒ヶ岳、鬼ヶ面岳、鋸山の姿は天気のせいかあまりパツとしないが、岩壁は大きい。山口ではバスの出た後なので、時間もあることだし西山部落より小滝駅まで歩くことにする。西山部落手前の峠より見た明星山の姿は、海谷山塊のそれを暗とすれば、まさに名のごとく明である。実に明るい壁が山頂より一気に小滝川までそぎ落ちている。石炭岩質の岩壁はあくまで美しく一度は登つてみたいところだ。西山部落のおばさんに、季節はずれの大変おいしいスイカをまるごと一個もらう。ノンビリした山行であった。



越後三山

星野辰也

S53年10月8日～10日

メンバー 星野、幸内

10月8日(晴) 大阪発(前夜22:00)——小出(8:37)——枝折峠(9:40)
——百草地(12:40)——駒ノ小屋(13:40)——駒ガ岳(14:00)——中岳(17:00)
自分にとって越後三山は、群馬にいるとき以来、8年余りも思い続けてきた山々の一つである。上越の山々の持つ味は北アや南アにはないものがある。今回上原君も含めて3名で行く予定であったが、彼がきたぐにに乗り遅れるというハプニングの為、我々2名となってしまった。上原君は後発の越後ですぐ後を追ったが合流はできず、結局魚沼(越後)駒ヶ岳を駒ノ湯より往復したそうだ。越後の山々は遠く、それは即電車賃に反映してくる。今回は最も安い案として、行きに急行きたぐに(6,100円)、帰りは雷鳥28号(7,600円)を利用した。小出駅よりタクシー(3,410円)で、枝折峠に向かう。車は右側に灰ノ又沢を見おろしながらぐんぐんと高度を上げ、40分程で標高1,160mの枝折峠に着く。ちょうど峠付近より上方が紅葉の盛りである。南東方向に初対面の男性的な荒沢岳、北東にはいかにも奥深い雪国の山という感じの未丈ガ岳、その間の足下には奥只見ダムによる銀山湖がある。峠より少し歩くと前方に駒ガ岳の雄姿が望まれる。最近冬期登攀で注目される佐梨川金山沢奥壁も右側にそぞり立っている。左側の北又川上流には今回の目的地の中岳、それに続く鬼岳と心に思い描いた上会越の山々が連なって、手にとるように望まれる。駒ガ岳までの単調な道を紅葉の真最中の木々にかこまれて歩く。枝折峠より百草池あたりまでは、標高差が少なく楽な道だが、これより駒までは、約600m程の登りである。いつしか気付かぬうちに荒沢岳と鬼岳の間に実に平らな平ヶ岳、そしてその後方に対象的な燧岳の突った二つの姿が見える。縦走路右側の大チョウ大沢は、駒ガ岳頂上に突き上げており、上部には快適なスラブ帯を持っている。沢登りが楽しめそうなところだ。それにしても越後の沢は実にすばらしい。どの枝沢も標高差1,000mを有し、万年雪とその戦いによってできた滝やスラブ帯を持ち、全てが一流のルートである。佐梨川、水無川、三国川流域の沢は雪渓も少ないが、北又川流域は10月でも雪渓が多く水量も多そうである。

駒ノ小屋は小さいが実に快適なところにある。ここよりピークまでは標高差100m余りである。駒ガ岳より中岳までは今までうつって變って、左右ともスッパリ切れた狭い稜線の縦走となる。遭難碑も多くなる。息子の死を悼んだ両親の歌に心をうたれた。統計によると1年に1

回山へ行く人が遭難する確率は 0.014 %であるが、10 回行く人は 9.56 %となるそうだ。ちなみに自分のことを考えると例会も含めて考えればその確率は 20 %を越えている。とにかく用心することである。

水無川上流の北沢は 6 段約 300 ~ 500 m の滝があり、黒部別山左俣とほぼ同じグレードである。ひたすら中岳へと向い檜廊下を越え中岳の頂上へ到着したのは日没の一歩手前であり、紅い色の空が美しかった。中岳には立派な避難小屋があり、今夜はここで一泊と思い中へ入るところ、中は国電なみの混雑でありこれではかなわぬと、避難小屋から避難して八海山へ向う稜線上に露營となる。草の上なので暖かくエアマットもいらないくらいだが、風は非常に強い。小出駅からここまで水のあったのは駒ノ小屋のみである。水筒は大きいのが必要である。夜中に美しい星にさそわれて（実はトイレ）外に出る、足下に南魚沼郡の町明りが美しかった。

Good-night

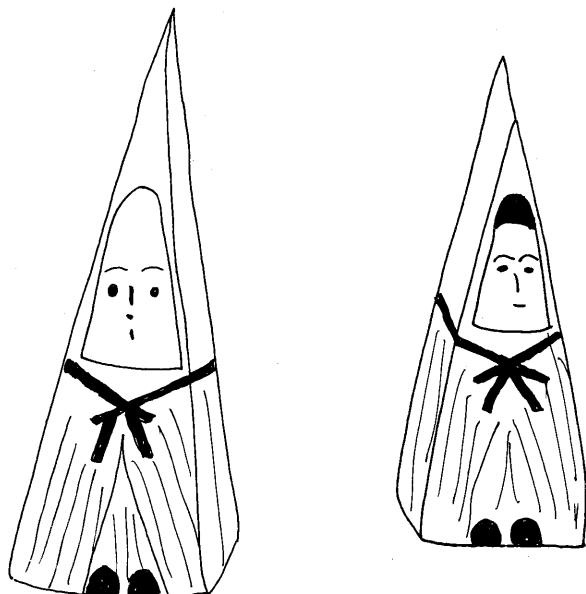
10月9日（晴但し強風） 起床（6:30）— 中岳頂上往復 — 出発（8:00）— 祓川（8:20）— オカメノゾキ（9:40）— 五竜岳（12:00）— 大日岳（13:30）
千木檜小屋（14:10）— 女人堂（14:50）— 分岐点（15:15）— 八海山神社（17:10）— 水尾部落（18:00）— 六日町（18:30）

夜半よりかなり冷え込み、テント付近の水溜りに氷が張った。風は一段と強くなり、上越県境の山々に低く雲が流れている。どうやら天気も今日一日と思われる。朝食後、中岳を往復する。小屋の住人は全て出発して一人もいない。我々がどうやら last である。中岳頂上にて眺望を楽しむ。思い叶へりと思う次第である。今日の目的である八海山までは、中岳より 800 m の下りと 500 m の登りである。登りが 300 m 少ないのが唯一のなぐさめである。テント場より 20 分程下ると、風になびく草原の中にメルヘンの世界、祓川のテント場がある。ここで水を補給する。ここより女人堂まで水場はない。御月山まで登りこれから一気にキレットへの大下りに入る。最悪の道である。オカメノゾキの付近は、左右ともスッパリ切れており、気の弱い人はノゾく気にならぬところだ。最低コルより八海山目指してひたすら登る。縦走路の登り下りほど山登りが不条理に思えることはない。腹がへるから飯を食い、飯を食ったことにより又腹のへる身体を維持するのと同じようなものだ。いずれにしろあまり頭の良くなることではない。我々の牛歩の歩みも何故か中岳より前に出発した連中をかたっぱしから抜いてしまった。昨日に続き今日も抜かれるのはゼロ、抜くのはあまた知れずである。しかし女性のみのパーティーを抜いてしまうのは少々おしいと思うが、この美しき山々にそれらは不要と思い、我ら岳入ただひたすら歩む。やがて八海山の岩稜（岩塔という感じ）が、目前に現われる。

信仰の山らしく、岩峰にはクサリが要所要所に取付けられている。しかし風は一段と強くな

り吹き飛ばされそうである。ここで飛ばされたら万有引力の法則により、 $H = 0.5 g T^2$ の空中遊泳の後に一気に天国行きである。なお天国行きの方程式は未解である。岩峰を廻いている道もあるらしいが、岳人のプライドが許さない（アルピニストはつらいものだ）。千木檜小屋まで 1 km 近く、岩峰の登り下りをしたが、クサリ場には岩登りの快適さはない。あるいは人工のクサリに対する不安感とそれを必要とする我身とそのルートに対する不快感だけである。やがて第1次世界大戦のときの戦車みたいな、全てトタン板で身をかためた不快な色彩の千木檜小屋へ到着する。この小屋は名前を変えた方がよい、すなわち千トタン板小屋である。よくもこんな小屋へ泊る人がいるものだ。ここより六日町を目指して一気に 1,500 m の標高差を下ることにする。五竜岳への途中で会った女性 2 名のパーティーに、今日はどちらまでと聞かれたので、下までと答えたらご苦労さんといわれた。だが我々はあくまで下ることにする。中岳よりの下りと合せると 2,300 m 程下ることになる。足がだんだん馬鹿になってきた。原因を考察してみると下る時の衝撃で頭の悪さが背骨を通過して、足まで移るのでないかとの思いがする。山登りというものはおもしろいものだ。おかげで頭が良くなった気がする。

夕方ようやく八海山神社へ着く。立派な神社であるが、なんとなく金儲け主義的な臭いが強い。神社より大崎部落、水尾部落へと歩く。水尾部落の雑貨屋でぶどうを買い、六日町行きのバスに乗る。一日早く下山したので明日の予定を考えてみる。晴れたら巻機山、雨ならば帰神と決め、新築の六日町役場の前の広場にテントを張る。夜半より雨となり帰神決定である。我々にご苦労さんといった女性 2 人はまだ八海山あたりだろう。滑りやすい道を秋雨の中 1,500 m も下ることを考えると思わず一言 “ご苦労さん”。バイバイお嬢さん。我々は長岡よりすいてい雷鳥 28 号の人となる。車中の雨も又よしという次第であります。



甲斐駒ヶ岳

野島博恵

行動記録

メンバー 萩本、国沢、野島、大川、大下

日程 10月 7日 大阪発(ちくま)

10月 8日 葦崎 — 竹宇駒ガ岳神社 — 笹の平 — 五合目 — 七合目

10月 9日 七合目 — 駒ガ岳山頂 — 双児山 — 北沢峠 — 仙丈岳五合目 — 北沢峠

10月 10日 北沢峠 — 戸台 — 帰途

10月8日(晴) 8:15 登山口到着。着いた途端、物々しい出立ちのつわ者どもぞらり。初めての山行である私にとって、不安は隠せない。女など…との一種、軽べつにも似た視線が集中。しかし、そんな視線も、私たちのファイトの前に消え去って、竹宇駒が岳神社にて朝食。一同山行の無事を祈る。9:20、さあ出発! ほほを包む冷気が、気持ちをきゅっとひきしめる。つり橋を渡ると、どこか六甲山のハイキングを思わせる登山道が続き、トラバースを過ぎた頃になると、もう、額ににじむ汗を拭う。立ち止った時の風の快さが視界のないいら立ちを和らげてくれる。12:00、笹の平到着、ここを過ぎるとすぐ急登にさしかかった。ズルズルすべて歩きにくい。けれども、そんな苦勞も「刃渡り」にさしかかろうとした時、ふと見た夢のような世界の前に、ふっ飛んでしまった。遠く幻想的な富士の景観、そして、堂々と立つ八ヶ岳の全景。思わず、ほっぺたをつねる。15:00、五合目着。今日の宿泊地七合目あたりを見上げると、ため息をもらしてしまう。そんな自分を叱りながら梯子と鎖の連続する山道を過ぎ、16:35、やっと七合目に到着。お互いの顔に笑がこぼれる。すでに夕暮。真赤に染った、夕映の富士のやさしさがうれしかった。夜、星がとてもきれいだ。いつも見なれた北斗七星の輝きも、また格別。

10月9日(晴のち曇り) 5:10 起床。みんな揃って、のんびり屋のお寝ぼうさん!。ご来光はすでに終幕。まぶしい朝日に、目をしょぼしょぼ。大きく深呼吸して、雲海に浮ぶ富士におはよう! なかなかエンジンのかからない足を前に進めて、9:02ついに山頂に到着。途中、真白な初雪の中でかわいい雷鳥に会えた。初対面の恥らいか、すぐにその姿を隠してしまったのは残念である。そして紅葉の双児山より、もう一度山頂に別れを告げて北沢峠へと下る。14:50 北沢峠にリュックを置いて、残る気力で仙丈岳五合目へ。この付近で、霰にあい

びっくり。途中、初雪をかぶった北岳にうつとり。そして、下山。北沢峠のテント場に着いた時はもうすっかり日も暮れて、一人、心配して待っていて下さった、大川さんの食事の用意に感謝して今日の行程を終わる。

10月10日（雨のち曇） 7：10 北沢峠を出発、一路戸台へと帰路につく。駅へ向かうバスに乗り込むと、ほっとして、こんな楽しい山行をさせて頂いた事を他のメンバーの皆さんに感謝し、今まで下界から雲上人として、あこがれていた「山」の頂上に立つことができた。喜びと、そのきびしさに胸があつくなるのを感じた。バスにゆられながら外に目をやれば、もう秋の色、秋風に吹かれて首をかしげるコンモスの花が、とってもかわいかった。

食 料 担 当 と し て

国 沢 昭 美

今回の山行は、女性ばかり5人、一緒に登るのはお互い初めてでしたが、女性ならではの細やかな心使いで、本当に楽しい山行をすることができました。

机上登山では、何度も登った甲斐駒ヶ岳、黒戸尾根は地図どおりきつい登りでしたが、高度が上るにしたがって展望が開けてくると、ザックの重みも忘れて、バテることなく、七合目のテント場に着きました。2日目も天候と展望に恵まれて、仙丈岳や新雪に包まれた北岳に感動しながら北沢峠まで下りました。双児山から眺めた甲斐駒ヶ岳は青空にくっきりと白くうかび上ってとても印象的でした。仙丈岳は、出発時間が遅れた為敷沢小屋までしか登ることはできませんでした。甲斐駒に登ってみて、南アルプスの持つ重量感に少しながら触れた思いです。

私の担当は食料係ということで、二泊三日分の食料の計画をたてたわけですが、何分テント生活の経験が少なくてとまどいました。リーダーの萩本さんに色々と教えて頂いてとても良い勉強になりました。日数が短いことと人数が多くだったので重くなりましたが、食料はほとんど生のものにしました。朝食は寝起きである為、食べやすく消化の良いものにしました。餅入り味噌汁に前夜の残りご飯を入れた雑炊はとても食べやすく、お腹のもちもよくて良かったと思います。昼食は時間をかけないよう、パン、バター、紅茶で済ませました。夕食は野菜とお肉を使った献立にし、二食共キュウリ、ハム、玉子を入れたサラダは好評で皆に喜んでもらえました。季節柄、生のものを腐らせることもなく、全体的にバランスのとれた献立であったと思います。

パーティー全員が、狭いテント内で寝食を共にして行動する山行というものが、今回の山行を

山小屋泊りでは得ることのできない味わい深いものにしてくれたと思います。テント山行の良さを実感しました。

空は青く澄んでいた……されどひざは痛し……。

大川綾子

夜汽車に乗るのは何年振りかと昔をなつかしく思う。萩本さんの愉快な話しが真夜中まで続、そしてこのエネルギーの固りの中で私が3,000メートルの駒ヶ岳に登るのはうそのようと思う。

10月8日 竹宇神社を出発して七合目小屋まで楽しませてくれた景色は、青空にそびえるは薄化粧の富士、夕暮オレンジ色に染まる空に浮ぶ富士、そしてキラキラ光る夜空は冷たい風が横切ってもあきることなく眺める。

10月9、10日小石にあたるたびに痛むひざも頭まで響く。甲斐駒頂上近くにある雪は一変して、ひざの痛さを忘れさせるほど慎重に登る。そして雪は暖かく、白さは自由な感覚であり、解放されたものに無中になる。違った世界を歩いているような思いで頂上に着いた。空は青く澄みきっていた。そして下りは、ついに曲がらない足との対決、途中でなげ出す気になれずいたわりの心境に変心する。これが後まで持ちこたえた気力である。

初めての山行、装備、忍耐のチェック、そしてそれらを自覚する所でもあり、与えられたチャンスは人を造る気がしないでもない。

終わりに

萩本維都子

大学を卒業してから、どういう訳かユウレイ会員になってしまい、その間に何と3年という長い年月が過ぎてしまいました。再びKACの方々と山行を共にできるなんて、夢のようです。3年のブランクを埋めて行こうと思いつつ、5月から今日まで参加させていただいた、例会、夏山合宿、個人山行のどれも楽しく心に残っています。女子の会員もふえ、私も新しい気持でこれからも頑張りたいと思います。

夏合宿が終わった頃から、秋はぜひ女子ばかりでどこかの山に行こうと考えていました。日程は10月の初めの連休にしようと決まり、皆早めに休暇を取ってくれました。

メンバーは5人、この顔ぶれでどの程度の山に行けるのか、又楽しく有意義な山行をするにはどの山を選べば良いのか、色々相談した結果甲斐駒ヶ岳に決まりました。2泊3日では甲斐駒、仙丈は無理だろうと思い、仙丈は次の機会にゆずり、駒ヶ岳1本にしほり、それなら一番しんどくて、でも一番だいごみのある黒戸尾根から入り、北沢峠から戸台にぬけるコースを選びました。幸い天候に恵まれ、黒戸尾根からの八ヶ岳、鳳凰三山、それから新雪の北岳など展望はすばらしく、皆思わず興奮！ シャツターチャンスが多くて困りました。

でも初めての女子ばかりの山行、小屋を使わず、テントをかついで、食事も自分達で全てまかなうという形の山行、不安がいっぱいでしたけれど一步山に入ったら、皆頑張って歩いていたし、ちょっとした岩場があっても恐れることなく着実に登っていました。ここでもし落ちたら私達はどうしようもないから、絶対落ちてはいけないと、内心かくごして登っていたのかかもしれません。大きな失敗もなく全員無事下山できたのは、メンバー1人1人がそれぞれに頑張ってくれたからだと思います。

次はぜひとも冬山へ!! と、帰りの電車の中でかたくちかいあって来ましたが、何とか実現させるべく、トレーニングにはげみたいと思います。

越前・荒島岳（1523m）

星野辰也

S53年10月22日 メンバー 星野、矢木

10月22日（晴） 大阪（前夜）——福井——下唯野（7：20）——小荒島岳（9：40
～10：30）——荒島岳（11：30～12：05）——勝原（14：00）——福井——神戸

越前の九頭竜川流域に荒島岳という越前の名山があると聞き、紅葉のころ散歩がてらに行つてみようという気になり矢木氏をさそった。あまり有名ではないので登る人も少なく、中出より登ったのは我々だけで、実に静かな山行であった。秋の山道を登りつめたところの小荒島岳よりの加賀白山の新雪をまとった姿が実に美しい。足下には越前の平野が広がり、南と東には名も知らぬ山々が続く。紅葉樹林の中の道は勝原よりの道を合せ荒島岳へと続いている。ゆるやかな道をなおも進み、昼前に頂上へ到着した。一等三角点のある山頂には電波塔が立ちならびいさきか興ざめがする。山頂から九頭竜湖は望めず、また白山も雲にかくれてしまった。紅

茶を一杯飲んでから勝原へ下る。急な道を一気に下るとそこはスキーホテルであった。無人駅より乗った気動車は、九頭竜湖へ遠足にでも行ったらしいガキとおばさんで一杯であった。こういうガキを見ると一気に疲れが出る。短かい秋の日の山行であった。

奥 稲 父

国 沢 昭 美

日程 11月3日～5日 メンバー 国沢、大下、広沢

大阪からの夜行で、眠れないまま塙尻についた。接続列車を待つ山姿の人々が待ち合室やホームにあふれている。昨夜の雨が気になっていたが、こちらの方は晴れそうである。垂崎からタクシーで増富温泉まで入る。タクシーの運転手さんの話では、瑞牆山荘までマイクロバスが出ているらしいが、3人共タクシーに酔ってしまい、時間的にロスするけれど歩くことにした。8時50分出発、平坦な道が続く。金山平の少し手前で、岩峰を乱立させた瑞牆山の特異な姿がみえてきた。空は雲一つ無くすみわたり、土曜の休みが急にとれてあわただしく山に来た私にとって、朝の空気の冷たさは心地よく、来てよかったですとしみじみ思う。3日行程だと瑞牆山に登れば、甲武信岳までは行けなくなるけれど、この山に登ろうと意見がまとまる。金山平から瑞牆山荘まではすぐに着いた。ここから登りとなる。富士見平12時20分着、昼食の後、空身で瑞牆山往復、頂上に近づくにつれて大きな岩峰が現れてきた、山頂も滑らかな大きな岩で、冬の装いのアルプスや富士山が一望のもとにみわたせる。八ヶ岳には雪はなかった。

10月に登った甲斐駒から眺めた八ヶ岳の方がすっきりとまとまっていて、風格があったように思える。明日登る金峰山の五丈石が小さくみえた。すばらしい展望に満足して下山、富士見平16時着、テントを張る。

2日目 5時50分出発、登山道は凍っているが、上りなので危くない。大日岩で展望がひらけた。富士山が信じられないくらい大きい。金峰山、10時着、ここからの山岳展望はすばらしい。昨日登った瑞牆山が下の方に見える。ここでカメラが故障してしまい、おしいことをした。五丈石には登らなかった。金峰山より朝日岳へ、11時22分着、ここでもまたすばらしい展望、大弛峰12時30分着、昼食の後テントを張ってから空身で国師岳、北奥千丈岳往復、北奥千丈岳は奥秩父の最高峰(2,600m)である。甲武信岳方面を眺めてみたがどの峰なのかわからなかった。山頂で遊んで17時大弛峰着。

3日目 5時17分、ライトをつけて出発、朝日峠まで登り返す。ここから秋山まで4時間行程、9時台のバスに乗ろうということで急ピッチで下るが、雪が積っていて歩きにくい。やっと林道に出て平坦な道を八ヶ岳や牧歌的な風景に心ひかれながらも、ひたすら秋山めざして黙々と歩く。9時35分秋山着、9時55分のバスにて川上駅へ、小海線で小淵沢まで高原列車の人となる。八ヶ岳がすばらしい迫力でせまってくる。関東からだと夜行日帰りで来れるこの奥秩父の山も、関西の人にはなじみが薄いらしく山行中、関西弁を聞いたのは一度だけでした。お天気に恵まれたせいかも知れないけれど、眺めがよくて、しかも比較的登りやすい本当にいい山でした。塩尻でおそばを食べ、特急「しなの」にて帰神、山よ、ありがとう。

八ヶ岳（赤岳）

大下澄子

昭和53年11月22日～24日 メンバー 幸内、萩本、広沢、大下
11月23日 美濃戸口(8:00)——美濃戸(8:50)——行者小屋(11:30～12:20)
——コル(13:30)——赤岳(14:20)——行者小屋(15:50)
11月24日 行者小屋(8:30)——美濃戸口(10:50)

今回はまず、かなりの雪を予想して出発しました。アイゼン、ピッケルも初めてなので、八ヶ岳を見るまでは、不安と期待の入り混じった気持ちでした。ところが行ってみると、美濃戸口までのタクシーの中から見たところでは、雪はどこについているのだろうという感じで、なんと言うか、安心、ショックという気分になり、歩き始めました。

美濃戸山荘付近で、おばさんが、「きょうは天気がよかつてよかったです。」と言ったのを聞いて、なるほどと思い、気分よく行者小屋に向かって出発しました。ところどころ凍りついていたり、雪も少し見えたけれど、行者小屋まではアイゼンをつけずに歩きました。そして行者小屋から少し登りつめた所で、アイゼンを素手でつけました。そしてしばらくアイゼン、ピッケルを使って登っていると、上からアイゼンもつけずに、キャラバンシューズをはいた人が降りて来ているのを見て、あれ? と思いました。赤岳からの眺めも良好、アプローチが短いということで疲れもそれ程なく、楽しい山行でした。

例会報告

7月2日 重荷 菊水—摩耶山

メンバー 幸内、三浦、星野、萩本、矢木、上原、国沢、松本

酷暑の中、菊水より摩耶山へと地蔵谷経由で行く。途中でアウトになるものも出て、結局地蔵谷入口で石を捨てたが、暑さを考慮すれば十分トレーニングにはなったことと思う。しかし新人の体力不足は明確なので、各自なお一層精進してほしいと思った。

7月9日 不動岩 R C T

メンバー 幸内、三浦、星野、萩本、矢木、上原、国沢、神田

又してもフライパンの上の登攀となった。早朝と夕方最後まで登ったので、充実したトレーニングができた。内3名は前日から連チャンなので一層のトレーニングになったと思う。また昼の野立と他パーティーには気の毒であったが、真赤なスイカが大変おいしかった。

技術的な反省点は、人工ルートに時間がかかり過ぎる点があげられる。ほとんどのルートは人工登攀を含んでいるのでもっとスピードイーに登る努力をする必要がある。

7月16日 国体予選援助の為、残念ながら例会は中止

7月23日 小豆島 R C T

メンバー 内藤①、宮本、三浦、星野、萩本、矢木、上原、大川

船便の都合で加藤汽船にて土庄へ到着(3:30)、これより小豆島に3台しかないカラオケタクシーで拇指岳へ向う。集中豪雨の復旧工事の騒音を聞きながら朝のうちにと思い、さっそく登攀を開始する。三浦一大川、星野一萩本、宮本一上原、内藤①一矢木のパーティーで一般ルートを登る。概して女性の方が張り切っていた。一般ルート終了後、三浦一星野でダイレクトルートを登る。2人とも初めてであったが、ピトンも多く、暑さを除けば快適な登攀であった。帰りの福田での海水浴のせいかどうか、数日後瀬戸内海で大量のハマチが死亡するというニュースがあった。今回の殊勲賞は上原氏であった。理由は参加者のみぞ知る!

7月30日 堡壘岩 R C T

メンバー 内藤②、三浦、星野、神田、上原、矢木、国沢、大川、新川、新川氏の知人
夜間は少し寒いくらいで、街明りがとても美しかった。朝から夕方まで各ルートを登り、

合宿前によいトレーニングになりました。

8月 6日 準 備 会

暑い街中での準備ではあるが、心ははやアルプスの峰々へという感じである。準備万全、いざ黒部へ剣岳へである。

8月 27日 反 省 会

9月 3日 不動岩 R C T

メンバー 内藤①、内藤②、三浦、上原

9月 10日 大月地獄谷

メンバー 内藤①、幸内、星野、矢木、山口、野島

Foで墜落事故発生。全員の協力で無事救出しましたが、六甲との安易さによる事故と一同大いに反省すると同時に、事故発生時の救出方法等学ぶ点も多かった。

9月 17日 石楠 花谷

10月 1日 雪彦山 R C T

メンバー 内藤②、矢木、幸内、間島、星野、上原、萩本、大下、広沢

参加者の技術 レベルと岩場のレベルの相異がありすぎた。上原氏はよく三峰正面壁を登ったと思う。

10月 15日 京都 北山

メンバー 宮本、矢木、幸内、上原、星野、国沢、広沢

10月 17日 大山小遠征

メンバー 幸内、上原、広沢、大下

10月 29日 重荷(宝塚 → 最高峰)

11月 12日 不動岩 R C T

メンバー 幸内、星野、矢木、神田、上原、広沢、大下、大川、萩本、堀田

11月19日 重荷(山寺尾根)

メンバー 幸内、三浦、矢木、上原、広沢、大下

11月26日 強歩+アイゼンテクニック

比良・沢登り

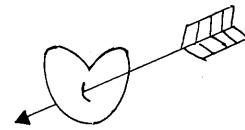
矢木研三

S53年5月21日

参加者は当番の幸内氏以下、宮本、星野、田中、上原の各氏と私の6名。早朝のバスに来るべく前夜から近くでビバーグ、京都三条を出発して1時間半程で坊村に着く。沢に降りて身支度を整えて遡行を開始したのが9時。明王谷の三の滝は星野氏がトップでザイルをフィックスして、全員が滝の左側を抜けるのに15分程かかる。出合に着いて軽い食事を取る。口ノ深谷へふみ込んで10分程でF1に着く、この滝もザイルをフィックスして抜ける。4m/mのシューリングをアブミにして登る所と、ヌルヌルした滝の出口で多少きんちょうさせられる。F2(15m)にはF1から5分程で着く、F1、F2とも左岸を抜ける。右岸通りに歩いてF3(20m)に着く、この滝は右岸を高巻く。F4～F6は小滝で右岸を抜け、F7の小滝は左岸を、又F8(7m)は右岸を抜ける。4段のナメ滝F9(40m)の右岸を抜けたのが1時50分、F12 F13、F13の小滝とF14(7m)、F15(20m)、F16(10m)それぞれ右岸を抜けF16に到着したのが1時40分、この頃からしばらく雨がパラツク。F17、F18の小滝の右岸を抜け、F19(20m)は左岸を抜ける。F20～F23と小滝を過ると二つ目の出合に到着、2時昼食を取って出発、最初の出合は左に進んだが、こんどは右側に進む。F24小滝F25(6m)は共に右岸を抜ける。F26(30m)のナメ滝の右岸を抜けてすぐ4段のF27(40m)がある。右岸のチムニー状の所を二段迄進んで左岸通しに抜ける。F28は小滝、F29の左岸を高巻くと、口ノ深谷で一番大きくそして最終のF30(40m)はすぐである。

右岸を抜けて20分程で谷の水量も少くなり、さらに5分程進んでワサビ峠と中峠の分岐に到る。4時にはやくも小屋に着く。小屋の前に咲くシャクナゲの濃いピンクの色が印象的であった。ワラジがだめになった頃比良駅がみえだす。

編 集 後 記



編集委員の植原氏が都合により退会されたので一人でやることになり、不十分ではありますがここに会員各自の活動ぶりを報告します。今年度は新人募集により女性が多数入会し、会もはなやいだ雰囲気になりました。活動面でも女性軍の活動が目立ちます。

しかしながら記録的にはいまひとつの感があります。暖かいコタツから飛び出して雪山へチャレンジしてみませんか。そのときはあなたの記録を是非とも月報へ！

月報用の原稿用紙が小生のところにありますので、必ず専用の原稿用紙を利用願います。また一部を研修所にも保管しておきます。 (T.H.)

例会のリーダーの方は例会メモ(参加メンバー、行動記録、感想 etc)を報告願います。

原稿提出先 〒655 神戸市垂水区塩屋町平尾19 川重塩屋寮
星野辰也

